

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884050

研究課題名(和文) モビリティと文学的想像力：コンタクト・ゾーン・ナラティブとしての米国モダニズム

研究課題名(英文) Mobility and the Literaty Imagination: American Modernism as the Narratives of Contact Zone

研究代表者

ハーン小路 恭子 (HEARN SHOJI, Kyoko)

上智大学・文学部・助教

研究者番号：30733563

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通して、モダニズム時代の文学研究に新しい視点を提供することができたと自負している。モビリティとコンタクト・ゾーンという鍵になるふたつの概念を導入することによって、近視眼的ではない広い視点で文学運動としてのモダニズムを捉えなおすことができた。また、人の動きとそれによってもたらされるさまざまな接触(時には交流という形で、時には敵対という形で)が文化テキストの生成にどのような影響を与え、またそれらのテキストにどのようにそうした接触が表象されているかを考察することで、人種、セクシュアリティ、階級の差異によって細分化され分断されているかに見える大戦間期アメリカの文化的風景の見直しを行った。

研究成果の概要(英文)：This research project has successfully provided a new perspective to the critical studies on American literature in the age of modernism. By introducing the key terms, namely, mobility and the contact zone, this project has reexamine modernism as a literary movement from a broader perspective. I have closely investigated how human mobility and a variety of moments of "contact" (which sometimes means an exchange, at other times means a confrontation) it prompts shapes the way literary texts were created. And in so doing I remapped the interwar cultural landscapes of the United States which usually seems to be divided and made fragmentary based on racial, gender, and class differences but in fact more fluid and relational.

研究分野：20世紀アメリカ文学

キーワード：20世紀アメリカ文学 モダニズム コンタクト・ゾーン モビリティ

1. 研究開始当初の背景

アメリカ文学およびその批評史において、モダニズム文学は伝統的には白人男性中心の文学運動としてキャンオン化されてきた経緯がある。たとえばその同時代にはハーレムルネサンスと呼ばれる黒人中心の文学運動があるが、そのふたつの運動をより広い視点で同時に論じる試みは、これまであまりなされてこなかった。本研究はアメリカ文学・文化研究史におけるそのような歴史的な過程に着想を得て、モダニズム文学を従来の文学史におけるキャンオンにとらわれずに読み直すことを出発点としている。

本研究の理論的な基礎となるのは、「コンタクト・ゾーン」という概念である。コンタクト・ゾーンとはスペイン語圏文学・文化研究者メアリー・ルイズ・プラットによって提出された、多様な文化の接触領域を指す概念であるが、文化人類学、比較文学の分野では広く知られるこの概念を使ってアメリカ文学、特にモダニズム文学を再解釈するという点に本研究の新規性があった。伝統的な文学研究では作家や文学運動は人種・セクシュアリティ、階級の差異に基づいて細分化が進み、広い視点でその時代の文化テキストを見直すという視点が欠落しがちであった。本研究はそのような状況に陥ることを防ぐために異なる文化がどのように接触しているかを問うことを研究の中心に据え、従来は並べて論じられることのない作家群、作品群を比較的に研究するためのメソッドを提供することをめざした。

2. 研究の目的

本研究は、1920年代から40年代までのアメリカ・モダニズム文学を「コンタクト・ゾーン・ナラティブ」として再解釈することを目的とした。コンタクト・ゾーンの概念を20世紀前半のアメリカの歴史文化状況に適用することにより、文学史上においてキャンオン化されたモダニズムの作品に新たな読解可能性をもたらすことができると考える。本研究は異文化間の交渉をモダニズムの成立要件としてとらえ、従来の文学キャンオン、文学史理解にとらわれない文学・文化テキストの横断的な読解を通して文学・文化研究に新しい視点を提供することをめざした。コンタクト・ゾーン概念の導入により、これまで同時に語られてこなかった文学・文化テキストや作家群の間に共通点を見出すとともに、人の移動という社会的現象と文化の相関関係を考察し、社会における文化テキストの存在意義を問うことも目的のひとつであった。

3. 研究の方法

本研究は文化人類学や比較文学研究の分野が蓄積してきた知見を取り入れるとともに、歴史的文化研究の手法も用いて歴史文献の地道な読解と丁寧な考察を通して説得力のある文化研究を提供することをこころ

がけてきた。20世紀前半のアメリカ合衆国におけるモビリティを歴史や時代状況に鑑みて考察し、さらにはその諸相とモダニズムという文化的事象との関連性を問う過程で、コンタクト・ゾーン概念に基づいて異なる文化的主体が移動とそれにより生じる文化的摩擦の中でどのように互いに交渉を行ったかを詳細に検討した。

具体的には The Great Migration と呼ばれる、ハーレムルネサンス運動の原因となった黒人人口の南部から北部の都市部への流入や、第一次大戦後の知識人や芸術家層のヨーロッパ移住に関する考察を行い、移動の感覚が文学、文化の形式にどのように反映されているかを見ていく。大戦間期を中心とした時期をモビリティやコンタクト・ゾーンの概念を通して振り返ることにより、モダニズム期に書かれた文学作品・文化テキストをそれまでのジャンルや人種、ジェンダー、階級の区切りにとらわれず総体的にとらえることができる。また、主として有名作品の比較的読解を行うことにより、キャンオン化された作品に新しい読解の視点を与えることができる。

4. 研究成果

本研究を通して、モダニズム時代の文学研究に新しい視点を提供することができたことと自負している。モビリティとコンタクト・ゾーンという鍵になるふたつの概念を導入することによって、近視眼的ではない広い視点で文学運動としてのモダニズムを捉えなおすことができた。また、人の動きとそれによってもたらされるさまざまな接触（時には交流という形で、時には敵対という形で）が文化テキストの生成にどのような影響を与え、またそれらのテキストにどのようにそうした接触が表象されているかを考察することで、人種、セクシュアリティ、階級の差異によって細分化され分断されているかに見える大戦間期アメリカの文化的風景の見直しを行った。

本研究のもうひとつの成果は、キャンオン化に伴って固定化、硬直化した文学史・文学研究のとらえ方に再考を促し、従来は並べて語られることの少なかった作品を比較的に検討することを通して文学史上の新しい系譜の創出に尽力したことにあるといえる。これにより、同時代であるのにあたかも別の時空間でおきた事象であるかのように互いに没交渉であり続けてきた白人中心のモダニズム研究と黒人作家中心のハーレムルネサンス研究の間の垣根を取り払い、ふたつの文学運動に見られる文化的接触に光を当てることができたことと自負している。

本研究は大きく分けて三つの具体的なプロジェクトに取り組んできた。

まずひとつめは、F・スコット・フィッツジェラルドによるモダニズム文学の代表作

The Great Gatsby (1925)を、ハーレムルネサンスや周辺文化との関わりとの観点から再考察することである。フィッツジェラルドの作品と黒人文化との接触を検討することを通して、新歴史批評系の研究者 Walter Benn Michaels の著作 *Our America*(1995)における代表的な研究によっていまでは一般化されたといえる、モダニズムは白人男性作家による排外的で閉所恐怖症的なネイティビズム、アメリカニズムを反映したものだとする考え方を乗り越えるような視点を提供することができたと考えている。本研究はコンタクト・ゾーン概念とモビリティという歴史的事象の導入を通してそのような従来の見方を見直し、モダニズム期の米国そのものを一種の文化的コンタクト・ゾーンとして読み直すことに成功した。その試みは現在の研究にも行かされており、さらに詳しくフィッツジェラルドとハーレムルネサンスの作家ネラ・ラーセンの作品の比較的読解を行う発表を現在準備中である。

また、本研究は ex-pats と呼ばれる海外(主にヨーロッパ)在住の芸術家・知識人の作品にも目を向け、第一次大戦後ヨーロッパで(もしくはヨーロッパを舞台にして)書かれたアメリカ文学作品・作家を横断的かつ比較的視点で読み直していくことも行った。具体的にはアーネスト・ヘミングウェイの *The Sun Also Rises* (1926)やフィッツジェラルドの *Tender Is the Night* (1934)といった作品におけるトランスアトランティックな文化主体を考察し、コンタクト・ゾーンの更なる拡大と混乱、という視点から多言語、多文化の空間としてのヨーロッパと、そのような空間の中でかつて持っていた力や全能性を徐々に失っていくアメリカ人男性主体の姿を考察することによって、文化の接触や衝突と交渉という視点から従来の文化的コスモポリタニズムを再定義するような研究を模索してきた。この小プロジェクトに関しては研究期間内に十分な結果が出せたとはいえないが、今後の研究でも引き続き取り組んでいくべきテーマであると考えており、文化の接触とセクシュアリティや人種の問題の近接性についても今後も考察を深めていきたいと考えている。

さらに、移動とコンタクト・ゾーンにおける文化的接触という概念から派生して、分断や隔離によって定義づけられがちな 20 世紀前半のアメリカの文化的背景に見直しを加えることにも成功した。具体的には、1920 年代～1940 年代ごろの南部諸地域を中心とした人種隔離の状況を扱った文学作品、映像作品群を検討し、それらの作品が隔離の現況を乗り越えるためのレトリックとして接触の比喻を多く用いていることに着目し、詳細な考察を加えた。その成果のひとつは 2015 年 12 月のディズニー映画『ダンボ』に関する発表に表れており、こちらは現在論文に直しているところであるが、この小プロジェクトに

おける接触概念の検討は、本研究終了後に開始した研究のテーマである、20 世紀アメリカ文学における情動と人種やセクシュアリティのかかわりという問題系にも直接つながっている。そういった意味で本研究は、より長期的かつ広い視点での文学研究につながる結節点の役割をはたしてきたといえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 2 件)

ハーン小路恭子、「Toni Morrison, *Sula* における戦争、平和と個人主義」上智大学英文学会第 40 回大会、上智大学(東京都千代田区)、2015 年 10 月。

ハーン小路恭子、「“When I See an Elephant Fly” 20 世紀的センチメンタル・ナラティブとしての『ダンボ』」多民族研究学会第 25 回全国大会、西南学院大学(福岡県福岡市早良区)、2015 年 12 月。

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

ハーン小路 恭子 (HEARN SHOJI, Kyoko)
上智大学・文学部・助教

研究者番号：30733563